

哲学者の揺籃

——ショーペンハウアー母子の旅日記 1803—1804 年

須藤訓任

アルトゥール・ショーペンハウアーの母、ヨハナが 19 世紀前半のドイツにおいて、一代の売れっ子作家だったことはよく知られている。そして、ヨハナとアルトゥールという親子の仲の犬猿ぶりも、それに劣らず有名である。とくに 1814 年 5 月に決定的な諍いを起こしてからは、二人は生涯二度と顔を会わせることがなかった。息子は 1838 年 4 月に死去した母の葬儀にも参列しなかった。

にもかかわらず、両人は 72 歳というほぼ同じ寿命を全うした(母は 1766 年 7 月生まれ、息子は 1788 年 2 月生まれで 1860 年 9 月に死亡) というごく表面的な事跡を初めとして、その生涯にはいろいろな面でパラレルな点があるのも事実なのである。母も息子も、著述家としての実質的なデビュー作(息子の学位論文『充足根拠律の四重の根について』、および(後述する)母の『1803、1804、1805 年の旅行の思い出』)は同じ 1813 年の発表であるし、代表作(ヨハナの場合は長編小説第一作『ガブリエーレ』、アルトゥールでは言うまでもなく『意志と表象としての世界』正篇)の上梓年もほぼ同じ 1819 年頃である。また、作家としてのデビューが遅れたヨハナが上述の旅行記によって一躍世の耳目を集めて流行作家となったのは 40 歳代後半であったが、著作の発表は早かったにしろ人々の注目を浴びることのなかったアルトゥールもようやく世間から本格的に関心を示されるようになるのは 50 歳代の 1840 年代になってからである。

むろん、こうした事例は「偶然」のなせる業にすぎないと、切り捨てることは容易だし、それだけに逆に、似た事例をさらに探し出すことも難しくないのかもしれない。しかし、単に偶然の結果として片付けられてはならない出来事もまた存在する。それが本稿のテーマとなる。1803 年 5 月初旬から 1804 年 8 月にかけて、ショーペンハウアー一家(アルトゥールの 9 歳年下の妹、アデーレを除いて)の行った、オランダ、イギリス、フランス、スイス、(ミュンヘンを中心とした)南ドイツ、オーストリア、シュレジアなどをめぐるヨーロッパ周回の旅がそれである。なぜこの旅行に興味が寄せられるのか。それは、ヨハナにあっては、この旅がその「思い出」の上梓によって、流行作家として地位を築くやすがとなったからであり、アルトゥールにとっては、十代半ばの若さでありながら、ペシミズム的世界観を定礎する決定的といってよい体験であったからである。息子の場合そのこと

は、よく引かれる後年の次の覚え書きにも明らかである。冒頭にある「16 歳のとき」、彼はまさにこの旅の途上にあった。(A. Schopenhauer: *Handschriftlicher Nachlaß*, 4-I, S. 96)

16 歳のとき、学校で学識ある教育を受けたわけでもないのに、わたしは、病・老・痛・死を目の当たりにした青年期の仏陀のように、生の悲惨に心打たれてしまった。この世が声高に判明に語っている真理はやがて、わたしのうちにも刻み込まれていたユダヤ的ドグマに打ち勝ち、わたしは、この世は至善の存在の作品なんかではありえない、むしろ悪魔の作品であって、悪魔は被造物の苦痛を目の保養にしようとして、被造物を存在に呼び出したのだ、と結論付けた。所与の出来事はそのことを示唆していたし、そのとおりなのだという信仰が優位を占めるようになった。

こうして兩人のいずれにとっても、この旅は後の人生に対し抜き差しならぬ重要性をもつことになった。旅の最中、母と息子は旅日記をつけていた。母はそれから約十年後ワイマール時代に、日記をもとに旅行記を公刊した。それが *Erinnerungen von einer Reise in den Jahren 1803, 1804 und 1805* (1813, 1814) であり、また *Reise von Paris durch das südliche Frankreich* (1817) である⁽¹⁾。これらは、主としてドイツ人に向けた外国旅行案内記としても構想されたという事情もあって、ドイツ語圏での旅は、すなわちスイス以降の旅はその中に含まれていない。一方、息子の旅日記は、1922/23 年にはじめて出版された後、最近では Arthur Schopenhauer : *Reisetagebücher* (Zürich, 1988) として上梓されている⁽²⁾。

以下では、兩人のこれらの著作と日記を比較することで、兩人の人格的特性や著述家としての特徴を浮き彫りにするよう試みたい。旅は母が 37、38 歳、息子が 15、16 歳の時のことであり、息子の日記の執筆は当然それと同時的であるのに対し、母のほうは 47、48 歳の時の書物であって、その点で文字通り大人と子供ほどの違いが両者の執筆年齢にはあるが、しかし、旅のいわばライブの報告であるだけに、後年の脚色がないことを含め、十代後半に差し掛かった息子の記述にも注目すべき点が多々ある。そのなかには将来の思想家を彷彿とさせる硬質な文章にも事欠かない。それに対し母の書物は、ユーモアとペーソスを織り交ぜた軽妙な語り口で運ばれ、人気「女流」作家に躍り出るにあたって、大きな一歩となったのうなずける内容である。それだけに、若きアルトゥールの残した文面からは、母の文章との対比によって、アルトゥールのうちで哲学者がいかんにして生成していったか、その一側面を炙りだしてゆくことが可能なはずである⁽³⁾。

1. 時代の代弁か、「永遠」への志向か

ヨハナの旅行記には、同じヨーロッパとはいえ、ドイツ人からするなら当時はまだまだ異国の地であったイギリスとフランスを中心に、人々の暮らしや習慣や国民性、風土、また絵画をはじめとする主たる造形美術作品の紹介と品評、また音楽界や舞踏会の模様など、多岐にわたる話題が豊富に盛られている。そうした話題に対する読者層の要求に応えることがヨハナの書の目的であった。ハンザ同盟の自由都市ダンツィヒの比較的裕福な商人の娘として生まれ、有力な貿易商の妻として英語もフランス語もよくしたヨハナにはその資格が十分にあったし、その点でまさに、自らもその一員である勃興しつつあった中産市民階級の異国の風物への欲求にこの旅行記の内容はぴったり合致していた。それは間違いなくヨハナ自身意識し意図したことであった。貴族階級の暮らしはいずれの国であっても同じようなものであり、その意味で貴族は「国民 Nation」の一部ではないから、この旅行記では触れないと述べた後、彼女はこう断言する。(XVI, S. 130)

旅行の最中私たちが目指したのはいつも、本来の国民のお国振り *Landessitte* を知ることでした。これはしかし、あまりに高きにも低きにも求めてはなりません。ただ中間階層にのみ見出されるのです。

旅行記は作者自身の階級的自覚と、その階級の期待を背負った書物だった。したがって、書物の諸処で作者の階級意識が顔を覗かせたとしても、何ら不思議はないだろう。彼女の中産階級意識を彷彿とさせるエピソードの確認から話を開始することにしよう。1803年5月8日、一家が馬車でドイツからオランダ国境を越えたところで泊った宿屋でのこととして息子のアルトゥールは次のような出来事を書き残している。(R, S. 49f.)

僕たちは、暖炉に吊るされた魚油ランプで乏しく照らされた小部屋につれてゆかれた。そこでお茶を飲んでいたので、退屈を紛らすために、僕は馬車からフルートを取ってきて、夜中音楽を奏でたり、日記に僕たちの宿命を記したりして過ごした。一時間もしないうちに、突然八人の農夫が僕らの部屋に入り込んできて、さっさと服を脱いで、そこにあった三つのベッドにもぐりこみ、僕のフルートの調べを聴きながら安らかに寝入った。その後は感謝の気持ちもあったのか、いびきで僕の伴奏をしてくれた。

このフルートの一件は、母の著書ではこうなっている。(XV, S. 15-16)

しかしだんだんと、私たちの周りも元気付いてきましたが、隣の部屋から物言わぬ男たちが入ってきました。どうやら、私たちの一行のひとりがちょうど吹いていたフルートの音に誘われたらしいのです。そうして早くも、われらが音楽家のことを、岩をも動かすオルフェウスの再来だとあがめ始めました。このオランダ人たちは、なんら恥じることなく、寝支度を始め、一つのベッドに三人ずつで横になったのですが、私たちはそれを驚きながら見る羽目になったのです。

これは私たちにとってあんまりのことでした。このような連中は始末に負えません。これは経験上わかっていることでした。それで私たちとしては、この人たちが出てきた部屋に退却するのが唯一賢明な策でしたが、そこで、世のあらゆるフルートをも凌ごうかといういびきのメロディーをやがて聞かされることになったのです。

息子はいびきを自分のフルート（アルトゥールが生涯フルートを嗜んだことは有名である）の音に対する「感謝の伴奏」と位置付け、大いに皮肉っぽいとはいえ、ユーモラスな一種の協調関係として描き出すのに対し、母のほうは「世のあらゆるフルートをも凌ごうかといういびきのメロディー」という形で、これまたユーモアが感じられないこともないとはいえ、ひたすら迷惑な騒音と見なしている。そこに、この、「始末に負え」ないという「連中」（ないし「農夫」たち）に対する彼女の評価が窺えるだろう（それはまた、ヨハナが自分の読者をどのような階層として想定していたかの一証左でもある）⁽⁴⁾。

こうした階級意識にもとづくヨハナの自負は、のちに息子が一生の使命とする「哲学」なるものに対する揶揄的な態度にも反映しているようだ。（母が旅行記を執筆する以前の頃から息子は哲学の本格的勉強に没頭するようになっていたし、すでに触れたように、母の旅行記と息子の学位論文の出版時期はほぼ同じである。）上述のオランダ国境での一件の後5月23日から24日にかけて、カレーからドーヴァー海峡を渡るイギリスへの船旅でのことである。一家が利用した船の船長は英仏戦争間近という風評につけこみ、二重の船賃を要求したりあこぎな稼ぎ方をする。問題はその船上で襲われた船酔いである。息子もかかったが、母は次のような船酔いに関する観察を記す。（XV, S. 110）

船酔いほど慰めのないものはこの世にありません。あらゆる力・あらゆる感覚をなえさせる弛緩に支配され、まともに船酔いすると水に溺れることもはやほとんど恐ろしくなくなります。この病ほど、生と死のすべてがどうでもよくなるという哲学的気分に駆り立てられるものはありません。

「哲学」へのヨハナの見方ないし偏見が窺えるような文面である。同じようなことは、フランスのボケールの有名な定期市についての風聞による想像についても言える。(F, S. 143)

商人以外にもこの時期にはほとんどあらゆる階層の人々がボケールに集まって、仕事を見つけてたんまり稼ぎます。職人・芸人・医者・薬屋、弁護士すらいます。フランスにもドイツと同じくらい頻繁に哲学者が出没するのなら、自分らの光で人類に奉仕しよう、哲学者だってやってくるでしょう。市につきものの輩も欠けていないのはもちろんで、スリやら博打打ちやら、といった人々が早々に大挙して入り込んできます。

この後者の文面を母がおそらく書いたとき（1816、7年）、すでに学位を取得していた息子は主著となる書物の準備に余念がなかった。息子との、もはや抜き差しならなくなった陰悪な関係がこうした文章の背景となっていることは十分に考えられよう。「フランスにもドイツと同じくらい頻繁に哲学者が出没するのなら」という文面、さらに「自分らの光で人類に奉仕しよう」とする「哲学者」なる「輩」は市のテキ屋の仲間だという冷笑まじりの主張にそのことは顕著である。

母は時代の潮流のなかで、そしてその潮流を肯定する立場で書を紡いでゆく。それに対し、息子は十五歳にしてすではっきりと「永遠」への志向を打ち出す。母と息子それぞれの基本的な精神的体質とその相違は、次のような箇所によくあらわれている。まず、ロンドン滞在時の息子の 1803 年 6 月 14 日の記述である。(R, S. 70)

ウェストミンスター寺院を目の当たりにするとたしかに、無限に考える材料が与えられる。このゴシック様式の壁の中で、これらの詩人・英雄・国王たちすべての遺物や記念碑が、こんなにも別々な世紀のものなのに、ここで一緒に並んでいる、あるいはむしろ、かれらの遺骨がここで一緒に安らっているさまを見ると、かれら自身が、世紀によっても階級によっても時間空間によっても分け隔てられることのない場所で、いまここでのように共存しているのではないかという美しい考えが湧いてくる。そして、かれらの一人一人をこの世で取り囲んでいた光輝や偉大さのなにをかれらはかなたにもちさったのか。国王は王冠と王笏をこの世に残し、英雄は武器を、詩人は名声を残していた。かれらすべてのうち、光輝を自分自身のうちから流れ出させ、外的事物から受け取ったのではないような偉大な精神は、その偉大さをかなたにともにもちさるのだ。そうした

者は自分がこの世でもっていたすべてをかなたにとともにもちさるのだ。

ここには、アルトゥールの抱懐する、「永遠性」への野心がよくあらわれている。引用中の「ここ」「この世」の原語はどちらも **hier** である。**hier** は一方ではアルトゥールがいま位置しているウェストミンスター寺院内であるが、しかし同時に地上の人間の生を意味する。「ここ」はむろん「この世」の「ここ」である。しかし他方、詩人や国王たちの遺物は「ここ」で一緒に並んでいるが、それは彼らが皆「この世」を立ち去ったからこそ並びえたのにほかならない。したがって、「ここ」は「この世」と対比される「かなた」(=「あの世」)をも指示し象徴する。そのかぎり「ここ」は「この世」であり「あの世」である。「ここ」における彼らの遺物の併存は、「かなた」における時空を超えた彼らの共存の反映にほかならない。もしこのような **hier** の多義性をなにほどこでも意識しながら、この文章が記されたとするなら、この十五歳の少年はただ者でない。「ここ」に「かなた」の永遠性を透視することこそ、哲学者の——そして、芸術家の——使命であるとは、少年が 15 年後明確に表明することになる思想なのだ。引用は間違いなく、15 年後の哲学者の予徴である。

しかし母との関係からするなら、より興味深いのは、マルセーユの港にある検疫施設にかけられたダヴィドのペストの絵についての描写(1804 年 4 月 8 日)である。(R, S.139-140)

その絵からはダヴィドの精神が突出した形で認識される。それはペストの戦慄させるような恐怖を描いている。特に表情豊なのは、絵の前面に横たわる男の姿である。死の蒼白さに覆われたその姿においては、ありとあらゆる苦痛を物語っている暗い眼差しがその蒼白と対照をなしている。魂は身体を見捨てて離れ去ったかに見えるが、唯一、火を失っていない大きな黒い目にのみかろうじて宿っているようだ。この恐怖の像は検疫官たちを脅かし精確にその職務を果たすよう呼びかけているのであり、たいそう適切どころに掛けられていると思う。

「暗い眼差し」と「死の蒼白さ」が「この世」と「あの世」(=永遠)の対比を代理している。この同じ絵に対する母の反応は以下のようなものである。検疫所の—— (F, S. 162)

ホールでわたしたちは有名な絵を見ました。それは、マルセーユ生まれの著名な画家ダヴィドがローマで、自分の故郷の都市を破壊した恐ろしいペストを記念して描いたものです。彼の比較的初期の作品の一つで、後に専念することになる演劇様式からはまだ自由です。色調はどぎつさが少ないですし、光の当て方もわざとらしさが余りありません。

全体の構成は単純で、後のよく知られたあらゆる作品よりも自然です。輝く雲の上には聖処女が天の女王として君臨し、〔ペストの治療で有名な〕聖ロクスがその前にひざまづき、病める町のために哀れみを請うています。前景には死に瀕した人が横たわり、横のほう少し上には、二人の若者がまさに事切れようとしているのが見えます。聖ロクスの顔はことさらに気高く表情豊かです。

いかにも評論家然としたこの文面のバックボーンにはヨハナの造形美術に関する豊かな素養がある（少女時代には一時画家となることを夢見たこともあるヨハナは、『ヨハン・ファン・アイクとその後継者たち』（1822 年）という美術評論も著した）にしても、いかにも解説調の語り口からしても、彼女はダヴィドに対してどこかよそよそしいという印象がぬぐえない。ダヴィドへの好みという点では、母と息子はまさに対照的である。息子の視線は「死の蒼白さ」という「永遠」に吸い寄せられるのに対し、母は主として「この世」の人々に尽くす「聖ロクス」に注意を注ぐ。母の目にはどうやらダヴィドの迫真性があるの強さと映っていたようだ。それはまた、ヨハナの極端に走らない中庸な、というか微温湯的体質ともつながっているように思われる。そのことは *Reise nach England und Schottland* の第 3 版（1826）の上梓にあたって、（旧版のそれに代えて）新たに起草された短い「序文 Vorwort」に何より明快に語られている。以下はその全文である。（XV, S. 6-7）

〔初版が発行された〕12 年前や〔第 2 版発行の〕7 年前に劣らず控えめに *anspruchlos*、私は二巻からなるかつての旅の思い出のこの第 3 版を読書界の手に委ねます。

単純であること、そして真実を愛することがこの書の唯一で最良の装飾でしたし、いまでもそうです。必要な場合には文体や言葉遣いを改善しましたが、そうすることによってのみわたしは力のかぎり、予想外に与った賛同にこの書がよりふさわしいものとなるよう努めました。

過大な要求を抱かないでこの書を手に取っていただくよう、重ねてお願いします。そこに含まれているのは、一人の女がこの世で見、観察したことについての物語にすぎません。この物語はもっぱら楽しんでいただくためのもので、根本的な教えを垂れようとするなぞ滅相ありません。たやすく私と同じものの見方ができるはずのすべてのドイツ女性にこの書を捧げます。そして、ただこうした考え方をこそ、殿方にもこの書の物語に興味を持っていただけるだろうことは、わたしとしても心得ております。

ここには、いまだ家父長制の色濃い社会にあってあくまで女性としての自分を男性の下に位置づけながら（あるいはそう装いながら）、したがって、現行の社会体制を基本的に前提し容認しながら、男性にはない女性の独自性を「控えめに」自己主張して自立を模索する一人の作家の姿がある。その女性らしい自立性とは、「楽しませること *unterhalten*」すなわち、エンターテインメントであることに求められ、それは「根本的な教えを垂れる *gründlich belehren*」ことと対比される。そしてこの「根本的な教え」とはなにより「哲学」である可能性が高い。「哲学」との（無意識的な）差異化によってヨハナは女性作家としてのアイデンティティを確立しようとしていたのだ。しかも、他ならぬ息子、アルトゥールの哲学志向を一方で強く意識しながら。ところが、面白いことに、初版の序文ではいまだ、「楽しませること」と「根本的な教えを垂れること」との対比は、明確に打ち出されていない。初版の該当部分の文面はこうである。——わたしが差し出すこうした旅の思い出によって、

女性が物事について男性とは違った見方、違った描き方をする、それも、言われている通り、根本的 *gründlich* ではないかもしれないが、全く異なった観点から対象を示して教えを垂れる *belehrend* というやり方でそうするというのもまた、おわかりいただけるでしょう⁶⁾。

見られる通り、第3版序文とは異なり、初版では「根本的」と「教えを垂れる」の間に楔が入れられており、両者を連続的に取り扱っている第3版とは対照的である。初版ではヨハナは自分の書が「教えを垂れる」という性格を有することを自認している。そのかぎり、第3版ほど「哲学」との差異化はいまだ徹底していなかったと言ってよい。初版から第3版の間に存する12、3年間——その間には『ガブリエーレ』、『おば』という二つの長編をはじめ多くの小説作品が世に問われている——が彼女の作家としてのアイデンティティの確立を、哲学の排除を通して促したと考えなければならない。1810年代はじめにはまだ明確化されていなかった、彼女の文学者としての立場固めを可能ならしめたのは、哲学の、つまりは息子の放擲——そこにはいろんな錯綜した事情があったにせよ——だったのだ。第3版の上梓までには彼女の文芸作家としての矜持はそこまで到達していた。

次節では、こうした「哲学＝息子」の排除によって自己確立を図る女性文学者としてのヨハナと、「永遠の哲学」の核を自己のうちで芽吹かせつつあったアルトゥールとが、人間の極限的情況に対し、どのような対照的反応を見せるかを垣間みることによって、アルトゥール・ショーペンハウアーという哲学者の誕生の道程を跡づけることにしたい。

2. 「人間の条件」の観察

1804年4月ショーペンハウアー一家は南仏トゥーロンを訪問し、そこにある特殊な牢獄を見物する。そこでは廃船となったガレー船が牢獄に仕立てられ、囚人はガレー船奴隷として鎖につながれ、強制労働に従事させられている。その模様について、ヨハナは次のように描写する。——ここでは重労働で命を失ってしまう方がよっぽど幸せなのであって、死なないでいる囚人奴隷たちの運命はそれより無限に過酷である。一家がガレー船を見てみたいと恐る恐るお願いすると、それはとても耐えられるものではないからやめた方がよい、連戦のつわものたちもそこに行くと恐怖で身震いするのだから、と断られる。

とちょうどそのとき鐘が鳴り、...囚人たちが二人ずつ鎖でつながれて、ガチャガチャいわせながらあちこちから出てきました。...彼らの多くは、悪魔の仮面のような野蛮に引きつった顔をし、深い深い自棄と野蛮な殺人欲と腹立たしげな絶望の表情をたっぷり浮かべています。他の囚人たちは長い間悲惨な目にあって動物状態にまで鈍磨しているように見えました。多くの者から心を引き裂くような悲嘆と恐るべき恥辱の感情が読み取れました。最も恐ろしかったのは、内心の憤激を野蛮な歌やそれ以上に恐るべき笑いによってところかまわず面白そうに吐き出す輩でした。たとえば、足に鎖をつけられて縛られているある男は、口笛を吹き歌いその上大声を立てて笑うのですが、それはそれはぞっとするような口調でして、髪の毛が逆立つほどでした。過去のよき日を思わせる面立ちの20歳にもならぬ人間が、深い深い自棄を物語る石化した顔つきの老人の犯罪者と鎖で溶接されているのを見ることは、私たちにとって内心つらいことでした。

なぜなら、前者の若者にとって、後者のような者と一緒の夜はなんとおそろしいことであるか！ それに不思議なのは、終身刑などに処せられ何かと不如意のはずなのに、かなりの者が老齢を迎えるまで生き延びることであり、さらに不思議なのは、信じられないほど過酷な囚人生活にもかかわらず、最初の数ヶ月ですべての者が絶命することはないということである。この6千人にも及ぶ囚人たちが——

おぞましいことに隣人となるトゥーロンにはどんなことをしても私たちは住みたくないものです。たとえ、ここの自然がどれだけ豊かな宝角を振りまいてくれるにしても。[ガレー船を含む] この兵器廠に一度火がつき、門や鉄鎖が破られて町の住民がこの6千人

の絶望者たちの怒りの手に渡されることになりでもしたら、どうなることやら！これは考えるだにおそろしいことですが、だからといってまったく不可能な領域のことではないのです。(以上 F, S. 197-199)

最後の部分にはヨハナのいわば「市民エゴ」が剥き出しとなっている。(そして、このエゴが読者の賛同を得るものと期待している。) それだけでない。奴隷犯罪者を自分らの埒外に、極論するなら「人間」の埒外に放擲したうえで、どうして彼らが長生きできるのかわからないという文言からは、彼女の想像力の貧困が顔をのぞかせてしまっている。彼女の生きている世界ないし精神の狭さが明らかである。それに比べるなら、いかなる事態からも目をそらさずに冷徹に観察しぬこうとする息子の精神の強さ広さが際立つ。同じ場面の息子の描写は次のようである。少々長くなるがそのまま引用する。(R, S. 144-145)

兵器廠での重労働はすべてガレー船奴隷によっておこなわれる。彼らの光景はよそ者には大変目立つ。彼らは三つのグループに分けられる。第一のグループをなすのは、脱走兵とか、命令に従わなかった兵士とか、軽犯罪で短期間だけここにいる者たちである。これらは足に鉄の輪をひとつつけているだけで、自由に歩き回っている。もっとも、兵器廠の中を。というのも徒刑囚は町に出ることは許されないからだ。第二のグループはより大きな犯罪を犯したものからなっている。彼らは二人ずつ重い鎖をつけて一緒に繋がれている。最大の重犯罪者のグループである、第三のグループはガレー船のベンチに溶接されていて、そこからぜんぜん離れることができない。彼らは腰掛けてもできる仕事に従事している。これらの不幸な人々の運命は死刑よりもはるかに恐ろしいと僕は思う。外から見る限り、ガレー船は考えられる中で最も汚く吐き気のする滞在場所のように見える。ガレー船が海に出ることはもはやない。それらは古ぼけたお払い箱になった船舶なのだ。徒刑囚の居場所はベンチで、それに彼らは鎖で繋がれている。食べ物といえば、水とパンだけ。もっと栄養のある食べ物なしで、悲嘆にやつれ、きつい仕事をしながら、どうして彼らはもっと早くダウンしてしまわないのか理解できない。というのも奴隷労働の間彼らはまったくロバのような扱いを受けるのだからである。これらの惨めなガレー船奴隷の人生には、大変なことだが、まったく喜びがないことを考えてみるなら、これは恐ろしいことだ。そして、たとえ 25 年たとうがその苦しみに何ら目標が与えられない人にとっては、希望もまったくないのだ。このように不幸な人が暗いガレー船のベンチに溶接され、死以外にはそこから彼を引き離すことができないとすれば、そうした人が感じている以上に恐ろしい感覚を考えることができようか！——いく人か

の者にとっては、自分と同じ鎖に決して引き離すことができない形で溶接されている仲間と一緒に、その苦しみはいっそうつらいものとなる。そしてついに、10年、12年、あるいは稀なことだが、20年におよぶ永遠に長い年月の間毎日絶望のため息とともに待ち望んだときがやってきたとしても、つまり、奴隷労働の終わりがやってきたとしても、それで彼はどうなるというのだろうか。彼は世間に帰るのだが、世間にとって彼は10年来死んだも同然なのだ。もう10歳若かったら、展望を持つこともできたかもしれないが、それも消え去っている。ガレー船からきた者など、誰も引き受け手がいない。10年間罰を受けても、一瞬の犯罪を彼から洗い落としてくれはしなかったのだ。彼は再度犯罪者とならざるをえない、そして刑場で生涯を終える。——ここには6千人のガレー船奴隷がいると聞いて、僕はぞっとした。これらの人間の人間性は顔相学的考察〔アルトゥールはこの旅行後ハンブルクに滞在していた頃ガルの骨相学に興味を寄せることになる〕にたつぷりと素材を与えることができる。——

見られるように、息子は囚人奴隷たちの苦痛をありのままに洞察しようとしている。それは、彼らに自分らの領域に侵入されたらどういう恐ろしいことが起こるかという、現在の自分の境遇をまず慮るのでもなければ、それどころか、そもそも自分が彼らの立場になったらどういう苦難に喘ぐことになるだろうかという、他人の身に成り代わったつもり想像でもない。同じく、死（死刑）よりも恐ろしい重労働と言いながら、母が囚人たちの示すおぞましい姿をひたすら唾棄し、怖気をふるうのに対し、息子は「まったく喜びがない」、「その苦しみに何ら目標が与えられない」人間の絶望を的確に見通す。それは、息子が囚人らの苦痛や苦悩を単に彼らだけに帰して、内心我が身の安寧を寿ぐのではなく、人間存在そのものの苦痛であり苦悩であると感じ取っているからにほかなるまい。長じてペシミズムの哲学が開花してゆく種子がここに撒かれた。（ペシミズムを醸成する土壌そのものはアルトゥールの生来の気質である。）

ヨハナの「市民エゴ」と言われたが、しかし、その反面でヨハナは自分の理解できる範囲では弱者や貧者に共感を込めた心やさしい眼差しを注ぐ、「愛情」豊かな女性であったことも確かである。そのことを示す事例は枚挙に暇がないが、とくに、産業革命時のイギリス労働者階級や片田舎の貧困層の描写に明かである。前節で見た、オランダ国境での、民衆に対する彼女の嫌悪感は、彼らとの直接的接触が媒介となっているのに対し、以下で見る弱者への同情は、いわば離れた地点からの、その意味で抽象的な共感であるといつてよいだろう。そのかぎり、嫌悪と同情とはなんら矛盾せず彼女の中で両立するのである。

たとえば、リーズ Leeds (イングランド、ヨークシャー地方) の炭鉱労働者に関する記述。
(XV, S. 215)

空気は黒ずみどんよりしています。至る所で貧しい人が、金持ちをいっそう金持ちにするために働き、自分は貧しい暮らしをただ惨めにおくっている様が見られました。人間の勤勉の一幅の絵画ですが、その決して悦ばしい側面ではありません。額に汗しながら地面を飾り立てパンを稼ぐがっしりした農民の光景の方がどれだけ晴れ晴れしていることでしょうか。それに反して炭坑の蒼ざめて汚れた住民はなんと悲しげな様子であることでしょうか。彼はわずかの年月をただ悲慘に生きて行くために、モグラのように炭坑の内奥を掘り進まなければならないのです。これまで度重ねて長時間目に余るほど見てきたこの見せ物を前にして、わたしたちは思わず同情に襲われ、不安で胸が塞がれる思いでした。

あるいは、ケンモア Kenmore (スコットランドの田舎の村) の人々の暮らし。(XV, S. 287-9)

家は一部屋だけで、そこには家財具が皆無にひとしいことからして、本来人間は生きていくためにいかにわずかで足りるかがよくわかります。(…) 男たちの外見は荒々しいのですが、それは他のあらゆるヨーロッパのものと大変違う異様な服装のせいでもあるでしょう。最初目にしたときの印象は付き合うにつれてすっかりなくなります。外気ときつい仕事で褐色の彼らの顔は表情豊かで、好ましく規則だった特徴をしています。悲しみすれすれの静かな厳肅さが彼らの気質の基本調性のように見えますが、それでも大変愉快そうにすることもできるよう。思ったよりも、教養があります。自分らの父祖の物語や英雄歌謡は知らない者がいません。わたしたちが入れてもらった家ではほとんどどこでも聖書、祈禱書が目につきましたし、古い年代記もだいたいありました。それらによって家長は日曜ごとに家族を啓発したのです。冬には教会を訪れる道は通ることが難しくなりますが、敬虔な高地住民の場合には全く不可能になることを除けば、たいいていの者たちはどんなに回り道をしてでも出かけてゆきます。「わたしらは折り紡ぐのです」というのが、「寒さと雪で家に閉じ込められる冬は何をするのか」と尋ねられた美しい若い娘のわたしへの答えでした。(…) 周知のように、スコットランドの家族は成員が皆同姓であり、その数少ない種類の姓がそれぞれ無際限なほど多数三王国中に、それどころか、世界中に広がっています。にもかかわらず、同姓の人たちは皆聖なる絆で繋がっていると感じていて、それまで会ったことがなくとも、出会うやそのことを互

いに心を込めて確認し合うのです。

こうした「心温まる」描写はヨハナの得意手であり、彼女の面目躍如と言うべき文章であるが、そのすべては狡猾で摺れた都会人と対比される素朴で善良な田舎人というステレオタイプに収まってしまう。まさしく、「清く、貧しく、美しく」というところだろうか。また、貧しい労働者の悲惨な生活への同情にしても、それだけでは、同情する側の自己満足に終わりかねず、そのことによって、現状の変革への展望を閉ざしかねない。心やさしさは美德であるには違いないとしても、そこに潜む陥穽に対してヨハナは無自覚だったとように見える。

さらにリヨンの町に対する母と息子の反応を対比してみよう。まずは1804年5月上旬のリヨンに関する息子の報告である。(R, S. 151)

この都市はパリに次ぐフランス最大の町だが、現在の住民よりも多数の人間のために作られているといえるように思う。実際よく知られているように、リヨンほどあらゆる点で、革命時に被害を被ったところはないのだ。この華やかな大都市は今では遺憾なことに、前代未聞の残虐行為の見せ物として注目を集めている。処刑台で家族の何人かが、それもたいていは家族の長である父が死ななかったような家庭はほとんどない。しかるに、この不幸なリヨンの住民は十年前に自分らの友人や親族が大挙してミトラユ砲で射殺された同じ広場を散歩している。もだえ苦しみながら絶命した自分らの父の血まみれの姿が人々の目には浮かばないのだろうか。この広場を横切りながら、友人たちの処刑の模様を冷血に物語るができるなどと信じられるだろうか。時の力が、最も生々しくおぞましい印象をも拭い去るというのは理解不可能だ。

いっぽう母の記述はこうである。革命のとき王党派についたため革命派に徹底的に弾圧され、多数の人間が虐殺されたリヨン。遺児である若者から親たちの虐殺の模様を聞くと、(F, S. 238)

ここリヨンの地でいまでもひとがうれしがったり、いわんや笑ったりできることに私たちは驚いてしまいました。ここで暮らしながら、そうした話を聞いて、それでいながら苦悩のあまり生き絶えないことがどうしてできるのか私たちには理解できませんでした。災厄の草地には多くの花々が血塗られながら咲いているのが見えますし、高いポプラの

木のささやきは無垢のまま殺害された人々のため息のようで身震いがします。にもかかわらず、この民族は生まれつき気楽なたちで、そうしたことに与り知らないのです。…彼らは、不幸な運命の痛みを徐々に耐え抜いてゆく必要がなく、喉もと過ぎると忘れてしまうのです。確かに歴史は彼らにも残るでしょうが、その印象は飛び去ってしまうのです。さもないれば、どうしてここは見ものだとして私たちを引き回すなどということがありえましょうか。

息子との対照は明らかであろう。母と息子は同じ事態を前にし同じように不思議がっている。しかし息子は不思議なその事態を不思議として確認し、その不思議に耐えているのに対し、母はそれを「国民性」を持ち出すことで納得し、そのことによってあつという間に不思議を解消してしまう。自分の価値観をいわば一種の防御兵器として持ち出し、それによって事実を合理化し、事実の異質性を溶解させてしまうのである。

ヨハナは要するに、小市民の現状追認精神の文学的表現としての、19世紀前半のドイツにおけるビーダーマイアー様式の初期の一里塚を記す「女流」作家であった。彼女の文学的姿勢は、弱者への感傷的な共感が共感する自分への中産階級的自己満足に循環的に帰着し、そのことによって、一方で社会の不正に憤りながらも、不正な社会の現状の追認に終わりかねないものであった。しかし、たとえそうだとすると、その共感が結果としてもたらず弱者の悲惨の記述は、共感の輪を広げてゆき、やがては社会変革の芽となる可能性も秘めていることだけは最低限認めておかねばならないだろう。

一方、6月8日ロンドンにおける息子による公開処刑描写はいかに異質でおぞましく醜いものであろうとも、その異質さ・おぞましき・醜悪さをそのままに見定めて冷静に記述してやろうという気概に貫かれている。(R, S. 64)

今朝僕は悲しい芝居 *Schauspiel* に居合わせた。三人の人間が絞首刑になるのを見たのだ。人間を無理やり失命させるのを見るのは、いつだって最高に不愉快な光景だ。けれど、こうしたイギリス流の首吊りシーン *Szene* は、処刑が普通もっているようなおぞましさははるかに少ない。不幸な男はたしかに30秒も苦しめない。足場が落とされるやいなや、男は動かなくなる。顔には白い頭巾がかけられていて、よそ目には見ることもできない。このすばやい死は絞首によるものではないと僕は思う。彼らは首を絞められて死ぬのではなく、落ちていく跳躍の際結び目が首の骨を折るからなのだと思う。その証拠に彼らはみな一様に首を脇にむけてぶら下がっていた。この場面 *Auftritt* はそれほど仰々しくなされていないため、ここでは大して恐ろしくない。ここには死刑を告げる鐘

も死装束などもなく、処刑台は牢屋の入り口近くに立てられている。観客の人ごみもそれほど大きくはない、六週間ごとに規則的に絞首刑が行なわれるからだ。僕は牢屋の向かいの窓のところにいて、ごく間近から罪人たちの顔色をつぶさに窺うことができた。罪人たちは蒼褪めているようには見えなかった。彼らに縄がかけられたときには身震いがした、これはおぞましい瞬間だった。彼らの魂はすでに別の世界に在るようで、まるで、目の前のことなどたいして気づいていないようであった。僧侶が一人彼らと一緒に処刑台に上がっていて、とくにそのうちの一人と長いこと話をしていた。これらの人たちがどういう不安を抱きながら最後の瞬間さえも祈りのために用いようとしていたのか、それを見るのは、悲惨な光景であった。罪人の一人はその際両手を組みながらたえず上下させていたが、すでに吊るされてしまった後となっても、まだ二、三度この動作をしていた。――

15歳の少年の手になるとはにわかには信じがたいような、ユーモアすら漂いかねないほどの精神的「余裕」である。演劇用語をちりばめ、処刑を芝居仕立てとして描き出そうとする手法など、心憎いばかりだ。まさに「人生は――死すらも――芝居だ」と言うわけであろう⁶⁾。この冷徹な観察眼から、次に挙げるゲッティンゲン大学の学生時代のエピソードまでは道は直結している。大学が休暇になったので、アルトゥールは母のいるワイマールに滞在し、そこで彼は母の開いていたサロンの常連であった当時78歳の老詩人ヴィーラントに会った。ヴィーラントは、哲学を専攻しようという息子を諫めるよう母に頼まれていた(!)のである。哲学は堅実な専門ではないと忠告する詩人にアルトゥールは応えた。

人生とはいとわしいものです。僕は人生について熟考することによって人生をやり過ぎてゆくことに決めたのです。(Wilhelm Gwinner, *Arthur Schopenhauer aus persönlichem Umgang dargestellt*, Frankfurt a. M., 1987, S. 45)

さすがのヴィーラントもこの言葉には心打たれ、哲学に留まりなさいと述べたという。芝居としての人生や世界事象への冷徹で飽くなき観察――アルトゥールの用語では「直観」――、そして飽くなき冷徹さ故ににじみ出る観照のそこはかとない愉悦、それこそ少年のうちなる哲学者の揺籃を告げるものにほかならない。

最後に1804年5月の南仏シャモニ滞在のある夜の一節に触れておきたい。その夜を母は

「わたしたち」、すなわち、母と息子の二人のこととして報告している。(父は不在であった。)

わたしたちは夜遅くまで窓から、明るく輝くモンブランや月光の照明を受けた眺望を楽しんだ後、家のそばを流れるアルヴェ川のせせらぎを子守唄に深い眠りにつきました。
(F, S. 270)

母と息子の、もしかしたら数少ない幸福の共有の場面である。母がこの同じ場面を執筆したときには、彼女は息子と絶縁状態になってすでに数年を経ていた可能性が高い。これを書きながら、母ヨハナの胸にはどのような感慨が去来したことだろうか。

註

(1) 以下では前者はヨハナの『全集』(Johanna Schopenhauer: *Sämtliche Schriften*, 24 Bde., Leipzig/Frankfurt a. M. 1830-34), Bde. 15 u. 16: *Reise nach England und Schottland* から XV ないし XVI の略号の後にページ数を記して、後者は Johanna Schopenhauer: *Promenaden unter südlicher Sonne — Die Reise durch Frankreich 1804* (Wien, 1993) から F の略号とページ数によって引用する。

(2) 本稿作成に当たっては後者の版を用いた。略号は R である。また訳は、日本ショーペンハウアー協会篇『ショーペンハウアー研究』(1995 年以降)に掲載されている「ショーペンハウアーの旅日記」兵頭高夫訳を参照した。それ以外は母の書物をはじめ、翻訳は筆者の手になる。

(3) なお、両者の旅行記の比較については、つとに西尾幹二氏が「興味深い研究課題」として言及していた(中央公論社『世界の名著 続 10 ショーペンハウアー』1975 年、33 頁)し、また息子の旅日記の「あとがき Nachwort」で編者 L. Lütkehaus も簡単ながら試みている。本稿で期せられるのは引用を多くちりばめながら、「哲学者の揺籃」に焦点を定めてより具体的に比較を展開することである。

(4) ところで、息子は母の言及している、フルート演奏に対する「オルフェウスの再来」というお世辞じみた賞賛については触れていない。ここには、息子の旅日記がおそらくは両親によってによって「検閲」されていたという事情が絡んでいるかもしれない。親の手前、自慢話めいたことを引き合いに出しにくかったとは大いに考えられよう。われわれとしては、こうした「検閲」をかいくぐって胎動する、アルトゥール少年の「哲学者」精神の芽生えをこそ読み取らねばならないのだ。

(5) G. Habinger: *Frauen reisen in die Fremde, Diskurse und Repräsentationen von reisenden Europäerinnen im 19. und beginnenden 20. Jahrhundert*, Wien, 2006, S. 142 による。なお初版序文のもつイデオロギー的社会的含意については、同書 S. 141-144 において詳論されている。

(6) この公開処刑の様子はヨハナの旅行記では触れられていない。両人の精神的構えの相違である。

(本稿は「平成 20-22 年度科学研究費補助金・基盤研究 (C)・課題番号 20520016」による研究成果の一部である。)

[大阪大学教授・哲学]